

北海道から 岩手県へ

氏名 赤坂 誠

北海道函館市立青柳中学校 → 岩手県盛岡市立城東中学校
(期間：令和2年4月1日～令和4年3月31日)

1 派遣先の学力向上等の取組

○県の学力学習状況調査

県教育委員会では、H15年度から継続して、公立小・中・義務教育学校の小5・中1・中2を対象に実施している。各学校や県が児童生徒一人一人の学習の定着状況を把握し、その結果を基に指導の充実を図ったり、明らかになった学習指導上の問題点を教育施策に反映させたりすることで、県内児童生徒の学力向上を目指している。

○Gアップシート

学力向上の取組として、国語・数学・英語の3教科で計630枚の学習プリントがある。旧教科書をベースにしているため、ページや内容などに差異はあるが、一部のプリントはインターネット(iwate-school.jp)からログインをしなくてもダウンロードすることが可能になっている。通常の授業や家庭学習の課題などにも活用することができる。調査問題への対応力を身につけるためだけでなく、基礎基本の定着にもつながる。

○いわての授業づくり3つの視点

視点1「学習の見通し」

■児童生徒の姿
1 自らの気づきや考え、学習経験などを基に、友だちや先生との対話を通して、主体的に学習課題を見い出している。
2 課題解決に向けて、既習事項(用いるもの)や、考え方(用い方)を確認し、解決方法や結果を予想している。

【授業づくりのポイント】

ア 単元や題材など内容や時間のまとまりごとに、育成を目指す資質・能力を児童生徒の姿で具体化する。(目標と評価規準の明確化)
イ 児童生徒の気づきや考え、興味・関心から問いを引き出しながら、必然性のある学習課題を設定する。
ウ 児童生徒が、課題解決の方法や過程についての見通しをもったり、振り返ることができるように構造的な板書(キーワードを示す等)を計画する。(視点1～3に共通)

視点2「学習課題を解決するための学習活動」

■児童生徒の姿
3 わからないところは自分で調べたり、友だちや先生に質問したりして、見通しをもって主体的に課題解決に取り組んでいる。
4 自分の考えを、友だちの考えと比べながら見直し、よりよい考えに修正しながら、理由や根拠がわかるように整理している。

【授業づくりのポイント】

エ 児童生徒が各教科等における「見方・考え方」を働かせながら、主体的に課題解決に取り組めるような学習活動を充実させる。
オ 必要に応じて学習活動、支援方法を計画し、児童生徒が振り返り始めるようにする。
カ 目的に応じて、ペア等のグループ活動を位置付け、児童生徒が対話的な学びを通して、自分の考え等を整理したり、改善(自己調整)したりすることができるようにする。

視点3「学習の振り返り」

■児童生徒の姿
5 単元や題材など内容や時間のまとまりごとに、できるようになったことやできなかったことなど、課題解決の過程や成果を自分の言葉で表現している。
6 評価規準等を基に振り返り、課題解決の達成感や学習内容の有用感を感じながら、次時の学習や今後の生活に結びつけている。
7 自身の学習態度(振り返り強さ、自己調整力等)に変容を自覚している。

【授業づくりのポイント】

キ 単元や題材など内容や時間のまとまりごとに、学習内容や学習方法、課題解決の過程等、空んだことを自覚できるよう促す。
ク 評価規準や、児童生徒の自己評価・相互評価等により、児童生徒が達成感や学習内容の有用感を再得できるようにする。
◆上記3つの視点は、学習過程の振り返りと密接な関係のある学習づくりの上に成り立つものです。

『確かな学力育成プロジェクト』と称して新学習指導要領を改めて整理し、県全体での取組や学校の組織的な対応の強化を目指している。

中心となる授業改善の視点として「学習の見通し」「学習課題を解決するための学習活動」「学習の振り返り」に着目し、各発達段階や各教科に共通する基本として示している。

それぞれの視点に対して「目指すべき児童生徒の姿」や「授業づくりのポイント」があり、学習指導要領改訂の趣旨等を踏まえている。

特に、日々の授業や諸調査などで明らかになった児童生徒のつまづきに着目し、学習・授業改善に生かして児童生徒一人ひとりの資質・能力の向上を目標としている。

○いわて五ツ星の授業づくり

特に県をあげて、数学と英語の研修会や調査等に力が入られているように感じた。数学

科としては、授業改善の視点として「いわて五ツ星の授業づくり」(数学的な見方を働かせる、算数数学の学びに向かう態度を育む、活用を通して知識および技能の習得を促進、適用・発展・統合の時間を重視した展開、授業前半の数学的活動の焦点化・スリム化)が示されている。また、県教委や市教委の指導官や指導主事が各学校に派遣され、授業見学後、研究会を行い、今後の授業づくりに関する話し合いをもつことで授業改善にむけた取組も積極的に行われている。

岩手大学の立花正男教授や佐藤寿仁准教授を中心に学習会や勉強会などが開催され、オンラインなどで岩手県内だけでなく、全国の先生方が数学の指導法について研究している。

2 北海道に戻って実践したいこと

○防災・減災教育

東日本大震災からの経験をつなぐために、「いきる・かかわる・そなえる」という副教材が導入されている。県内沿岸地域への「復興研修」や「3.11集会」で当時のことを知る講師を招いて講演を聞くなどの活動が充実している。また、岩手県は全県異動で、震災当時に宮古地区で勤務した先生方からの話も聞くことができた。

東日本大震災から10数年が経過した今も復興が進んでいないことや当時の話や写真、動画などを教材として、もしもの時に備える準備や生徒自身が緊急時に身を守るための対応力が身につくように指導していきたい。



○生徒主体の様々な活動

派遣先では、生徒自身が学年や学校の課題に目を向けて気づき、取組や対策を考え、教師の助けを借りながら実行する姿が多く見られ、行事や集会等でも生徒会や学年のリーダーが中心となって活動を行っていた。

コロナ禍で生徒主体に活動する機会を制限されたことで、身につけられなかった力を少しでも取り戻してあげたいと考え、生徒の活動が円滑に進められるようにアドバイスや準備を行っていきたい。